

令和3年度 第6回沼田市市民構想会議の概要について

- 1 日 時 令和4年1月20日（木）午後2時から午後4時
- 2 場 所 テラス沼田1階 多目的スペース
- 3 出席者
 - (1) 委員 栗原明男委員、池田進一委員、吉野篁委員、青木富士夫委員、
小林昭紀委員、田村博史委員、小野里順子委員、小林彰幸委員、
小林好委員、萩原忠和委員、山本隆一郎委員、田辺祐己委員、
松井孝夫委員 (13名)
 - (2) アドバイザー 篠田 暢之氏
 - (3) 沼田市 五十嵐副市長、諸田総務部長
(事務局：星野企画政策課長、生方課長補佐兼政策推進係長、
清水副主幹)
- 4 配付資料
 - ・ 次第
 - ・ 令和3年度第5回沼田市市民構想会議の概要について
 - ・ 第6回「沼田市市民構想会議」
- 5 概 要
 - (1) 開 会 (事務局：企画政策課長)
 - (2) 会長あいさつ田村会長
 - (3) 前回の会議結果について 【事務局から説明】
 - (4) 議 題 (事務局：企画政策課長)
 - 1) 提言に向けた検討について
 - 2) その他
 - ・ 次回の会議日程について
＜第7回＞ 2月17日（木）午後2時から
- 6 議題内容
 - ・ 詳細については、別紙発言録のとおり

【会長】

皆さんこんにちは。今日は「大寒」で、一年で一番寒い日とされています。

今回「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の進行管理を行う事と、この構想会議の提言書のまとめの「たたき台」が出て、議論していただく予定でしたが、その予定が変わりましたので、事務局より説明して頂きます。

【事務局】

それでは前回の会議結果につきまして報告申し上げます。令和3年度、第5回沼田市市民構想会議の概要および発言録については事前に送付させていただきました。第5回会議は12月22日、午後2時からテラス沼田5階の第2委員会室で開催し、テーマとして市民生活向上のためのDX・社会的弱者のためのDX・DXから見た沼田の未来のまちづくりについて協議いただきました。

「沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」進捗状況の効果検証について、事務局の方で準備が整いませんでした。大変申し訳ありませんが、次回にさせていただきますことで、ご了承いただきたいと思っております。

また、提言について、皆さんのご意見をまとめる作業の中で、まだ議論が十分でない点があるということで、先生ともお話をしまして、引き続き協議いただきたいと考えております。

【会長】

はじめに、篠田先生からアドバイスとしてのご発言をお願いします。

【篠田先生】

この会議から市長への「提言書」を提出するにあたり改めて3点の視点を提起し、それをたたき台に皆さんにもう一度、総括的に種々活発なご意見を頂く議論を進めて頂ければと思っております。

その理由の一つは、地域活性化議論の背景を、この会議の席上で、根本的な問題点を共通認識として持ち合う事が無いと気づきました。当然、その事は今年度のテーマであるDX活用の可能性と沼田市が求める方向性についても関わりますので、広くこれまでの議論を補う意味でも、ご議論を進めていただけたと考えました。

2つ目の理由は、この市民構想会議は行政からの押し付けではなく、皆さんが市民代表として、市民主体・住民主体の視点に立って、沼田の未来のまちづくりを議論し、その意見をとりまとめて市長に提言し、その実現に向けて市政に取り組んで頂くという従来にはない住民主体の意思確認の貴重な機会と考えました。

従来のまちづくりにみられた「行政主導型のまちづくり」を転換し可能な限り住民主体の目線からまちづくりを議論し、提言する取り組みは、横山市政の開かれた大切な市政運営の象徴として進められてきました。この点で、この会議は、従来のまちづくりとは視点が大きく異なっています。このことをこの機会に再認識して頂く、そうした意味からも、皆さんからDXを含めてこの機会に活発なご発言いただく必要があると思われました。この後のご発言に期待したいと思っております。

事務局から、お話がありました市民構想会議から市長への提言が進められた各種の提言は、行政サイドの取り組みとして、提言の実現やその進捗状況を確認する効果・検証の報告を本日、計画されていましたが、ご報告がありましたようにオミクロン株の爆発的感染拡大による対策等、加えて、年度末に近いことなど、各種の事情が生じてお約束が叶いませんでしたが、委員の皆様方にはこの点では寛大なるご理解をいただければと思っております。

尚、前回議論で、ひとつ取り残した問題があります。DXで「取り残される人」

等について、表記を再考した方が望ましいとのご指摘がありました。それと共に、今後DXを進めるうえで、機器の不慣れな方への対処をどうしていくのかの問題と、DX促進によって障がいのある方たちが不利益を被らないようにするにはどうしたら良いか？の議論がありませんでした。こうした問題点についても、皆さんの忌憚のないご意見を、この場でいただければ、提言書の作成にあたり、事務局も大いに助かるものと思います。

ところで「地域活性化議論」の背景には「都市の肥大化が地域の疲弊化を招く」との問題提起が社会学の各種実証的研究から70年代に入り指摘され、警鐘が鳴らされた事から始まりました。全国の主要都市の繁栄が、皮肉にも周辺地域の疲弊を進めていると理解され、地域社会を疲弊から守るための対策が急がれました。今に至るまで繰り返し議論され、およそ50年の時が費やされてきました。

上記の問題点と共に、70年代に入り、国立社会保障人口問題研究所は日本の少子高齢化が予測どおりに進むと日本は将来、人口減少により大変な事態に追い込まれると警告しましたが、この警告を活かせず難題解決に苦しんでいます。

戦後の人口増加から人口減少への社会変化は、私たちの経済活動や暮らしを変えるからです。しかし、これに対して政府は適正な対応策を講じず人口減少は本格化し、経済・暮らしの流れが大きく変わり、日本の未来のまちづくりに、この問題が重くのしかかり、私たちを悩ます難題となっています。

少子高齢化問題は当初から、この市民構想会議でも繰り返し議論されてきました。現実問題として、学校の統廃合や公的施設の統合整備など沼田市にも例外なく当てはまり、これらの現実認識を市民の共通問題であることをご理解いただきたかったからです。「足し算」から「引き算」への価値観の転換を強調したのは、こうした理由からでした。妙案があれば、ご発言下さると助かります。

2点目は、特に「首都一極集中の問題」です。首都一極集中は首都周辺地域を疲弊へと追い込む事実です。産業の主要な拠点が首都に集積され、働く人々がそこに集中して住まい、働く人々の置かれた環境の劣悪化が進み、その問題解決を図る施策に、地域活性化論の根拠が置かれていたからです。

山村を起点に川上で働く人々を、川下の工場労働者へと吸引する労働政策がとられ続けた結果、首都一極集中の加速度的進行と共に、川上の山野は荒れ続け里山の豊かな暮らしが消滅へと追い込まれていきました。他方、川下の平野部では、各種の都市公害に悩まされる事態が多発し続けましたが、こうした政策には「二律背反」(どちらも妥当なことが互いに矛盾を招く・アンチノミー)の現実を生み続けました。暮らしを営む大局観の基礎である、より良いバランス感覚が不足していたことを否定できません。

3点目は、工業先進国への加速度的成長を促す一本調子の産業政策を優先する政策を前提に、ここでも一本調子な産業政策が続けられ、そのために各種インフラ整備が、国をあげて進められました。その実現を補強する社会制度をはじめ、諸制度がその目的にかなう手段として進められました。恐らく、沼田でもそれらの具体的な事例を、種々思い浮かべられるのではないかと思います。

ハードなインフラとともに人づくりの基礎ともいえるソフトなインフラ整備の教育も例外ではなく、戦後日本の学習指導の原理に「行動主義の心理学」(J・B・ワトソン、米国の心理学者)が積極活用され、学習効果の引き上げが進められてきました。結論から言えば反応スピードの良い学生が優秀な学生とされ「人間力」を語る基準が反応スピードの高さに置かれました。

人としての豊かな人間形成の視点が、「行動主義の心理学」の応用からは曖昧な

位置づけにされたまま、据え置かれ続けたのです。私たちは人として悩み・考えることで、豊かな感情の世界に導かれ、人として成長していきます。が従来の知識偏重の詰め込み教育が長らく教育の本道とされたため、知識教育の知育と知恵を育む心の教育の乖離が、生じたまま放置されてきました。子供たちにとって、喜びや悲しみを誰にも・何処にも吐き出せない、心を満たせない非情で空疎な社会が進みました。

「地域活性化」と「地方創生」は同じような内容と理解されがちですが、それらには根本的な違いがあります。両者は必ずしも同じ内容をもった政策ではありません。その違いを鮮明に理解して頂き、問題整理したいと考えました。

「地域活性化」は地域の経済活動の向上を目指すことであり、その為の人口増加策が中心です。活発な経済活動もそれを支える人口増も「地域活性化」の両輪の必須条件と考えられてきました。本格的な人口減少を迎えた日本は、この施策が社会の実態と合わなくなっていることは明らかです。

この会議でも話題となった徳島県神山町は料理を彩る薬物を採集して、これをビジネスの「種」として、村の経済活動を一気に高めた事例の地域としてよく知られています。高齢のおじいさんやおばあさんがスマホやパソコンの情報端末の機器を使い、直接、お店と商談を進め個人でも年収1千万を売り上げ続けた見事な成功例のひとつです。高齢化も進み村も衰退するばかりでしたが、農協スタッフの着眼により、スマホやパソコンを使う経営指導を熱心に進め、現在の豊かな村に生まれ変わったのです。都会生活では日常生活で普通に使われていた情報端末のIT機器やスマホの活用を、高齢の村民に使い方を丁寧に指導し、地域の生き残り策に活用したのです。都会の飲食店で必要とされた、料理のツマの薬物の消費動向と供給体制を、情報端末活用と結びつけた事が成功の秘策だったと言われています。

この成功はその後、若者たちが農山村を目指し家族ごと田舎暮らしを楽しみながら情報発信する「ノマド生活」を基本とするライフ・スタイルの先駆的事例と言える、新しい暮らしや経済活動の流れを暗示させる出来事となりました。

スマホとパソコンさえあれば、好きなところに居て必要な収入を図り仕事が出る可能性が示されたからです。「ノマド」は遊牧民を意味しますがスマホやパソコンのIT機器を駆使して、好きな場所で好きなように仕事をする新しいスタイルを意味する言葉として使われています。この先駆的事例が神山町の高齢者の方々の先進的な取り組みでした。DXによる成功例です。

次の事例は、鳥取市内から車で20分もあれば行ける田舎の八頭町です。ここはもともと僻地で鶏を牧場のように平飼いをしていた地域に過ぎませんでした。が、ここの鶏が産んだ卵が大変美味しいと口コミで広まり最終的には美味しい卵でパンケーキ作りが行われ、その評判が評判を呼び、県内外から多くの消費者や観光客を集めるまでになった地域です。鳥取市の22万人の人口の倍以上の人々がここを訪ねる「大江ノ郷」と呼称する観光リゾート開発が進みました。

ここは特別なプロジェクト開発から始まった地域ではなく、鶏の卵を手掛かりに懸命に取り組み立派な一大観光地に成長した地域です。平飼いの卵を産むブランド卵を活用して地域を活性化させた、いわば「何もないからやるしかない」という、「集中（特化）」で成功した事例です。

この例から分かるように、八頭町に較べれば、沼田市は人口も約4万8千人を擁し、しかも農産物も観光も、各種の条件が豊かに揃い、はるかに好条件に恵まれています。そのため議論が拡散し「あれも・これも」となり、残念ながら持て

る地力の魅力が分散している印象が拭えません。

八頭町では、直売所やレストランを展開するほか、閉校した学校の校舎を改修してホテルとして再活用し一大リゾート地を形成し年間最大57万人の観光客が訪れる「地域活性化」に成功した事例です。国から莫大な補助金をもらって、ここまで出来たわけではなく、地元のやる気と根気と健気な、これしかないという懸命な取り組みの成果が、成功を呼び寄せたのです。

ところで、「地方創生」は国の政策で東京一極集中を是正し地方の人口減少に歯止めをかけ、日本の活力を底上げすることを目的にした政策でした。2014年9月3日に第二次・安倍改造内閣発足後の記者会見で、正式発表されたこの「地方創生」の中身は社会学者からは、全国各地の地方に、バラマキを行い政権支持につなげる「ローカル・アベノミクス」と形容されました。全国に交付された資金の使い道は、各々の自治体が必要とする事業に充当すればよいという、自治体にとっては比較的使い勝手の良い補助金政策で多くは住民サービスの為の自治体の事業推進に活用されました。

アベノミクスが日本経済を牽引する大企業中心の経済政策に軸足を置き産業の担い手をバックアップする経済政策でしたが、それに比べ「地方創生」で示された施策はローカルな地域の衰退を止めるために、各自治体が必要とした諸事業に使える補助金を地方自治体に流し込む政策でした。人口減少や企業数の減少に伴う税収の枯渇に苦しむ自治体には、諸事業推進のための「干天の慈雨」となりました。

しかし、社会変化は着実に進み、コロナ禍はその変化の本質を国民の前に一気に明らかにしました。折からのコロナ禍によるリモートの奨励は従来の働き方を変え、暮らしの本質に目覚めさせることとなりました。誰もがパソコンやスマホで仕事ができるような状況になり、「ノマド生活」が全国で普及したことにそれが現れました。従来にはない視点とライフ・スタイルが地域再評価の機運を高めはじめ農山村へ興味関心が社会的に注目されるようになりました。

若者を中心にした「ノマド生活」の加速は、同時に「オワコン」層の拡大に拍車をかけ始めています。オワコンはコンテンツのブームが過ぎて人気が下火になり、時代に合わない魅力を失ったモノやコトを、こだわりなくあっさりとして捨て去り、次々にライフ・スタイルを変えていく時代を象徴しています。新たな社会変化のオワコン時代を前に、それに耐えられる地域の魅力づくりが待たれています。

前々回、この会議で皆さんにお示しした時代の声が、「IQ（知能指数）時代」から「EQ（心の知能指数）時代」へと、人々の価値観が変わり始めている事実をお伝えしました。成功へのカギは沼田が「心の知能指数」を高め・引き上げてくれる要素を存分に活用する条件を整える事かと思えます。

人材派遣会社大手のパソナは東京の本社ビルを売却し、淡路島に本社を移しました。まさにリモート時代の象徴です。JTBも東京の本社ビルを売り払い賃料の安い物件に移りました。社員は最先端の「ノマド生活」が基本です。

地方創生は交付金活用による行政サイドの各種の地域活性化の取組が期待され全国で行われました。しかしそれらの多くは、実際には成功例を後追いするような形に留まり、結果的には横並びで画一的になり、期待するような成功に結びつきませんでした。

事業推進の主体が行政にあり、事業の立案や推進が市民参加によるものではなくて、地域活性化策と市民生活とが乖離していたことが、上手く行かなかった原因とされています。補助金活用で一生懸命、取り組まれたにもかかわらず多くの

場合、必ずしもその効果が出ない残念な結果になっています。

では、どうするのか？になります。が、「リセット」の必要です。市民も意識を変える必要に迫られているのです。行政も国も、考え方を変えないとやっていけないと指摘するのは、政治評論家の森田実さんです。

森田さんはズバリ「日本の未来の社会創りにはリセットが必要だ」と指摘し以下のように記しています。「日本の政治はこの50年間、坂を静かに転がり落ちていきます。この間に行われた改革は、ことごとく失敗し続けました。でも政権与党はごまかしだけはうまくいった。近年は官僚もよく協力するので、その傾向がさらに強まっています。」と述べ、国交省の数字の改ざんや他省庁も同様な改ざんがある事実に触れ、改革の必要性が求められていながら、それが進まなかった残念な状況を正常化する必要があると「リセット」の必要性に触れています。

あらゆる分野で、日本は新時代に向けて「リセット」が求められていると述べ、いろいろな反論意見はあると前提した上で、ではどうしたら良いのかという話になると付記しています。ここで価値観や意識を変えなければ、絶好の反転攻勢の機会である新時代は乗り越えていけないと見ています。時代を迎える「先回り理論」が、私達に求められているのです。昨年、逝去された前・経団連会長の故・中西宏明さんは「日本がこのまま構造改革に着手しなければ、日本の10年先は暗い」と明言し、政権担当者に繰り返し警告していました。

以下は私が提案する価値観や意識を変えて頂く手掛かりのキーワードです。自著で既に公刊した、時代をより良く理解する為に提起した用語です。

- ① 「共存」から、「共生」へ、「共生」から「共創」へ。これは90年の自著の出版で提起した新概念で明らかにしました。この『共創』という言葉が最近SDGsの社会的理解の深化と共に、しばしば使われるようになりました。
- ② 「拡大均衡」の成長経済から「縮小均衡」の経済へ。この市民構想会議では「縮小均衡」を目指す価値観の転換を訴え続けてきました。縮小はあらゆる資源を凝縮して有効活用する為のカギ。引き算思考は物事の優先順位を明確にする手掛かりです。
- ③ 「量から質への転換」。1986年以降、日本の社会は量的充足ではなく質的充足へと、社会的な価値観が変化し始めました。生産者における消費拡大の政策と、消費の質を求める消費者マインドの乖離が社会で始まったのです。
- ④ 「選択と集中」（「選別と特化」）。「あれも・これも」から「あれか・これか」への転換です。満腹状態の消費者心理がバブル経済崩壊によって鎮静化され消費抑制の適正化が進みミニマリストや「断捨離」ブームを生みました。
- ⑤ 「過去の延長線上に未来はない」。過去の成功例に見倣っては新たな失敗を招く時代となるという、厳しい現実を理解して頂く標語です。
- ⑥ 「モノからヒトへの転換」。生きる喜びと日々の豊かさを感じながら生活できる尊さを、世代を超えて誰もが共感できる大切さが理解されるようになりました。まさに「心の知能指数（EQ時代）」の幕開けです。人としての感受性の問題が広く社会で求められ始めています。

こういったキーワードを手掛かりに、お考え頂けると、今年度のテーマのDXにもつながる、新たな気づきによる、ご意見をいただけるように思います。

【会長】

まず、先生のお話にありました「地域活性化」の議論が、今回は少なかったのではないかとこのことを踏まえて、ご意見いただければと思います。

【委員】

tengoo の活用についても、スマホ等を全家庭に備え、単純にショートメールができるくらいの機能を活用して人と情報が繋がり自由に交流できるインフラ整備が、今後の最重要基盤になると思いました。

最近、パソコンを使う業務がとて増えています。そのため肩が凝ったり目が疲れたりと、効率化や合理化だけではフォローできないテレワークで仕事をするために生じる問題点があります。また、長時間テレワークする難しさから生産性が悪くなるのが分かり、それが難点です。ワーケーションやコワーキング・スペースなど、近くに出社して数人で集まって取り組むことで生産性が上がるような事例が出ていると思いますので、そのようなことを沼田市の特性を活かして出来たらリモートの仕事の課題なども解決できると思いました。

【委員】

今できるとすると「見える化」だと考えました。DXについても先進的な事例を後追いして真似ても仕方がないということからも、人が良いと感じることは、人それぞれだと思います。

沼田に住んでいても、あまり良いと思わないかもしれませんが、それを発信してみれば、以外にヒットするかもしれません。まずは「見える化」を進めることが、一番大事なのかなと思いました。

取り残される人という表現に関しては、もし可能であれば「取り残さない」という決意であれば良いと思います。その時に障がいのある方に、そうした知識や協力できる人が、サポートすれば良いのだと思います。

例えばスマホの講座で、得意な人たちが苦手な人たちに教えていくなど、若い人を含めて、何か役割を持つと楽しく豊かな人間関係を築けるように思います。手助けされた人から「ありがとう」と言われるのは、年齢に関係なく誰であっても気分が良く嬉しいと思います。そういう活躍ができる場所を作っていくきっかけが、まず「見える化」ではと思いました。

【会長】

ありがとうございました。委員のご発言の中で「ワーケーション」という指摘がありました。例えば都市部の方が、沼田の温泉旅館を活用して頂き、温泉につかって二泊三日くらいで仕事をしてもらうとか何か検討が出来そうですね。

【篠田先生】

今、会長さんから「ワーケーション」のことで、温泉というお話が出たので、ご本業の委員さん、是非、広域沼田にとっての観光と温泉の活用について今後どうしたらいいか、今のお話を含めて妙案がありましたらご示唆いただけませんか。

【委員】

当然、老神温泉でも「ワーケーション」に対応できるようにしようと進めました。その条件としてネット環境の整備はもちろん必要ですが、ネックになったのは、食事の問題でした。老神温泉のように山の中で周りに何もなくて温泉しかない。プランとして、昼食のお弁当を手配しますという案内は作ってはみましたが、ワーケーションの候補地からはもれてしまう。

私も前橋とか高崎のビジネスホテルなどに自分のパソコンを持ち込んで集中的に仕事をやる場合もありますが、夜になれば飲みに行きたい時もあり、そうした気軽さと自由度が無いと、ワーケーションも簡単にはいきません。

tengoo につきましては今回、群馬県の愛郷ぐんまにプラスして市の方でもポイントを差し上げる件は皆さんもご存知かと思います。問題は現場の人間もお客様も tengoo を使うために、chiica という地域通貨のアプリをインストールして頂

く事をご存じないまま「老神温泉に泊ると3,000ポイント貰える」とお越しになるのです。できる限り対応しますが、お年寄りの方はスマホを持っていなかったり、スマホを持っていても、どう操作したら分からない方もおります。

先ほどお話のあった、お手伝いをして頂ける人が、ボランティアで傍にいてくださる体制にできれば、素晴らしいと思いました。現実にはこれを旅館やホテルのスタッフでやろうとすると、負担がものすごく多くなってしまいます。

【委員】

私が老神のことを詳しく知るきっかけとなったのが、高校生の活動に同行して、地域を歩き、生徒が疑問に思う事を地域の方から学習する機会があったことです。

子供たちが地域のことを学ぶにあたって、学校に頼りきっているわけにはいかないと思いますが、学校と地域が連携して、地域学習が出来る機会が増えれば、地域の歴史を知る事にもつながり、地域の価値の再評価へと見直される新しい発見につながると思います。

若者から見た地域を委員の指摘のように「見える化」して発信していけば沼田の未来の議論が豊かになると想像します。

【会長】

ありがとうございました。

私が市役所にいた時には人事の関係にいましたが、インターンとして大学生を1～2週間お預かりすると、県内の出身者も多く、インターン中は観光関係に従事してもらう事が多かったですが、沼田の観光関連の様々な事実を知ってもらいこの地を選んでももらえれば良いかなと当時のことを思い出したところでした。

【委員】

スマホを通じて地区情報や町内会の情報を、紙媒体ではなく電子情報として閲覧的なものにしていく機会かなとも思います。

電子媒体への移行が一気に無理であれば、紙媒体も使い、両方とも活用をして少しずつ慣れていくことも、工夫としてはありかなと思います。

以前は学校の関係の情報は、タテ系列で全部連絡網ができていました。しかし個人情報保護の観点から、紙媒体によるタテ系列の連絡網による連絡が出来なくなりました。むしろ学校は今メールシステムで全体に情報を一元管理して共有化しています。アンケートを取るのも、一発で返信が返ってくる、逆に楽になったという話を、校長先生から聞いたことがあります。良い悪いというよりも、そういう時代に入ったのかなと再認識しました。

自宅に同僚を招き、イノシシや鹿肉を提供したりするのですが、飲み水は水道水ですが、来た人が「これ本当に水道水ですか？」と感激します。飲んで「うまい・うまい」とペットボトルに入れて持ち帰る人もいました。沼田の水は都会の人からすれば、素晴らしい天然水と同じように感じるらしいのです。「何も無い」のではなく、都会にはない豊かな自然がしっかりある、そういう印象を受けている人が多かったと思いました。

【篠田先生】

前回、リンゴ・サイダーとキーマカレーをいただきました。貴重品ということでしたので、大切に持ち帰り、友人たちと試飲・試食し、その感想を聞きました。瓶のボトルのデザインがアール・ヌボー風で、その意図が何だったのか議論になりました。ユニークで高級感のあるボトルデザインにリンゴ・サイダーが入っていると見えなかったようで、誰もが印象に残りました。

キーマカレーもまずまずの評価でしたが、好みの味付けに出来るヒントとなる

記述が解説としてあると良かったという意見もありました。ご馳走様でした。

【委員】

サイダー等は、本当は地元の人に作ってもらいたいのです。

例えば、沼田の池田の人が作ってもいいから、そういう所に作る施設に補助金を出して、みんなで作って売ればいいんです。

サイダーは重くて嫌だなと言っていました。商工会や地域を良くしようと、仕事柄みんなに渡したりして頑張っていますよ。今、考えているのは乾燥芋を、うまくふるさと納税の返礼品に上げてもらいたいと思っています。

そういう品物をふるさと納税への返礼品に出して、地域がみんなで助け合えると良いです。何かあったら、老神温泉に渡してお客に来てもらえば良いのです。

【委員】

実は愛郷ぐんまがスタートして、沼田市で tengoo のポイントを上乘せで付けてくれるようになった時に、前回皆さんにお配りしたセットを宿泊してくれたお客様にプレゼントしました。その経費はもちろん老神温泉で支出し、商工会から購入しました。予算の関係で1,000セットしか買えませんでした。見事に1,000セットが1ヶ月で出てしまいました。もっと買いたいというお客さんがいらっしまったんですが、残念ながらそのご希望には応えられなかったです。

【会長】

ありがとうございます。この話をもう少し続けたいのですが、少し休憩を取らせていただくことで、ご了解いただけますでしょうか？それでは、7～8分間ここで休憩させていただきます。

※休憩中

【篠田先生】

今、先進国をはじめ、アジアの国々でも、焼き芋ブームですよね。勿論、干し芋も含めてですが。そうした影響は、ここでも出ていますか？

【委員】

やっとなブームですね。もっと早くブームが来るかなと思っていましたが、人気は出ているのですが、一番は生産量が足りていない状況です。ふるさと納税の方も考えているのですが、生産量が足りていなくて追いついていない状況なので、余っている土地などありましたら教えていただけたらと思います。

【篠田先生】

シンガポールやアジアの国々も、日本国内でも、とにかく芋ブームに火がついています。原材料の芋が不足しているということでしょうか？

【委員】

茨城の方とか千葉の方とか、埼玉の川越も量的にはあるのですが、輸出ということにはなっていないですね。芋ってどこでも作れてしまうので、輸出して人気が出れば、向こうで作られてしまうということを考えているのかと思うのですが。

【篠田先生】

それは種苗法などで守られていないという問題が絡んでいるのですか？

【委員】

品種の方は新しい種苗法が出来まして、紅はるかとかシルクスweetとか、今流行の人気の新種は守られている状況です。

【篠田先生】

イモは古来、歴史的にも重要な農産物・食品として大切に扱われてきましたね。そのため日本では、農産物の品種改良など、食品の質を上げ、収量拡大を目指し

暮らしの質を底上げする品種改良に時間と労力を掛けてきた歴史があります。

そうした意味から、農産物の「種苗」(しゅびょう)は“タネも仕掛けもある”国民的財産であり、知的財産のひとつ「知財」です。

これらに法的な保護がかけられる「種苗法」で、国民生活の知財としての権利を守る保護をしっかりと守らないと、農家の方は困りますね。「種苗」は発明品と同じ価値を有するものです。特に、農産物の輸出は種苗の改良に懸命に取り組んできた農家の方々の権利が含まれており、これを守り、保護される形を外交的にも主張しないと駄目ですね。これは主に国が責任をもって進めるべき重要な課題です。

【委員】

一度、輸出はさせていただきましたが、なかなか輸送コストが合いませんでした。国の補助をいただいて、何とかできた状態でした。自分たちの規模から考えると、費用面からも考えると、ちょっと難しいかなと思います。

【篠田先生】

イノシシはイモ好きと聞きますが、イノシシの被害はどうでしょうか？

【委員】

原発事故の前にはイノシシ対策は吾妻が軌道に乗ったところだったんです。「あがしし」というブランドで、とっても美味しく牛肉並みの価格なので、持って行けば確実にいくらでも買い取ってもらえました。

【委員】

しかし、群馬県は東日本大震災による東電の原発のメルトダウンによる放射能の拡散による放射能汚染の関係で、売れなくなりました。自己消費で食べることは自己責任ということで、食べられているようです。

【委員】

吾妻は、ちょうど軌道に乗ったところだったので、本当にかわいそうです。

※休憩終了

【会長】

それでは再開してもよろしいでしょうか？

女性の委員さんからもご意見を頂いたらいかがでしょうかというリクエストがありました・・。

【委員】

学校の先生の働き方改革が始まり、部活動の在り方が、従来とは変わります。そういった所に卒業生達が働けるようなシステムを作っただけだと、とても良いと思います。ただ、ボランティアだけではやっていけない事業だと国も示唆しておりますので、地域企業の協賛ですとか地域でバックアップできれば、若者達を引き込めるようなシステムが出来るといいと思います。

「取り残される人のいない」という問題意識を失うことなく、それを施策として進めて頂くことがとても大事だと思いました。「喜びと豊かさを感じて生きていける」そんな社会に出来たら素敵だなと思いました。そのためには住んでいる私たち一人一人が、日々の自分に自信を持って生活ができるような生きがいを持つ暮らしが、豊かなまちづくりに繋がっていくに違いないと思います。

先ほどの回覧板をスマホでというお話も、「できない」ではなくて、みんなの力で「できる」に変えていく取り組みが重要だと思いました。少しずつ地域の皆さんにDXに慣れていただく、新しい仕組みに慣れていただくことが、大事なかなと思いました。

【委員】

無責任な提案になり申し訳ないのですが、お年寄りも結局は機器を使ってもらうしか無いと思います。皆さんのご意見の中には、なかなか嫌だという意見や、慣れないという意見などがあり、他にもうひとつはその為に費用がかかるということがあります。そこで、小学校中学校へ貸し出しをしている感じで、スマホをご希望の方に、貸し出す。貸し出すだけでは使ってもらえませんが、そういうのを案内する人を組織化する、地区に1人や2人いるよという格好にして、使っていただいて、便利に回覧板もスマホで済みますよとか色々な連絡もスマホで済みますよと。沼田市のホッとメールを私も毎日見えていますけれども、こういうものが全部の方が見られるようになれば、省力化もでき、先へ進めると思います。

【会長】

ありがとうございました。委員さんのご提案ですけれども、思いつきですが、例えば地区公民館のような場所にWi-Fi環境を調べ、ご本人には貸出用のスマホを持って来て頂ければ、そこで情報が得られます。皆さんに集まってもらえば、それがお年寄りのサロンのような場所にもなって人的交流も盛んになるきっかけにもなり、いいのかなと感じました。

【委員】

企業や会社ではスマホでもパソコンでも、1台いくらという契約をしていないと思います。高齢者用に無料で使っているパソコンを常設しておき、社員やスタッフが困っているお年寄りのサポートする仕組みを作れば経費的には全く問題が無いと思います。

もう1つ、今は通学のために前橋や高崎に行く学生が多くいますが、その学生が学校に行った時に口コミで言うのが、他の人たちに繋がる一番よい方法かなと思います。口コミを活用して、こちらに観光に来てもらったり遊びに来てもらったりしていけば、直接的でいいのかなと感じました。

細い道を通って行くカフェや、まだ知られていないお店など、そういうお店に出会い、それらを拾い上げると、若い人も沼田で働きたい気持ちになり、そういうのを「見える化」するのも面白いように感じます。

【委員】

スマホの操作についても誰かが支援してくれると良いという話ですが、今では各学校にタブレット端末を導入した関係で、DXの支援員が複数校担当しています。週、2～3回、専門の指導員を招くように、沼田市は契約をして専門的な操作技術をもつ人を派遣・勤務させているようです。

そういった方に地域でも、タブレットやスマホの設定のお手伝いをお願いし、簡単な支援をしてくださるような契約にできると、地域の方も利用しやすいのではないかなと感じました。

【委員】

地域活性のためには「経済力の向上」と「人口増加」という条件が考えられていたというお話だったのですが、人口増加は経済力が上がれば、自然に人口が増加すると感じています。

沼田のお水は意外と美味しいという話の中で、利根沼田の魅力として美味しい水が、水道水から出るというのも大きな魅力に繋がると感じました。新しい切り口と言いますか、新しい視点から、これまでのアレコレを見直すことで生まれる気づきや発見がすごく重要なのかなと感じています。そういう魅力を発見し、より多くの人たちに伝え表現することが、委員指摘の「見える化」することででき

るのがDXで、その活用が効果的かなと思っています。

若い方を沼田に招き入れることも、企業が儲かることで、若い方が来るようになり、時給が上がることでも沼田に来て貰える。

世間の話では「コストコ」では、時給が2,000円位らしいです。通常、都市と地方では当然、時給は変わるとは思いますがコストコさんは全部一律2,000円に決めたようです。そうすると地方のコストコに若くて優秀な人や四年制大学を出た人が集まったそうです。時給を上げることで、若い方や優秀な方が集まる、そういう時代なのかなと思います。

【会長】

ありがとうございました。今のお話について何かありますか？

やはり若い人の着眼点とか発信力というのは、私たちの年代にはないパワーを持っていると思います。そういう方たちにパフォーマンスできる場所を作り提供していく必要があるなと感じました。ご意見には、全く同感です。

高校生とかにインフルエンサーとして発信の場所を担ってもらうような取組もいいのかと、ご発言をお聴きしてそう思いました。

先生、中間点ですが、ご指摘があればお願いします。

【篠田先生】

沼田の魅力の受発信や、そのための仕組み造りの議論が今日は主題となりましたが、もうひとつ議論を深めておく必要がある課題があったと思います。

先ほど、会長さんが公民館活用に触れられている際に、その事に気づきました。このところ世界各地で巨大な自然災害が頻発しています。起きて欲しくはありませんが沼田の非常時について、この会議で議論を深めた記憶がありません。

明るい未来に向けた取り組みや工夫について、皆さんから様々な提言やその実現のためのお話がありましたが、それと共に『その時どうするか？』非常時対応の議論であるBCP（事業継続計画 Business continuity planning）について、この市民構想会議としては、触れていませんでした。

大規模自然災害発生時に対して、市民の連携やその対応等について市民の声を反映した、市民の為の「BCP対策」の大規模災害に対する合意形成の基本が不明で、その点が議論として積み残されてきたと思いました。

こうした課題に対して街の危機管理上、行政サイドでは勿論、ルールブックをお持ちだと思います。が今回のコロナウイルスの爆発的感染拡大を見ても海外紙や海外ニュースから得られる情報と、政府の対応とに相当なギャップがあり、何故だろうと考えることがありました。日本は相変わらず、一本調子のまま「パンデミック」(大規模で広範囲)との理解が主で、エンデミック(地域的規模)や、エピソード(中規模なもの)という、3つのフェーズ(局面)があることさえ十分に周知されていません。

日本では、このように、明確に医学的概念として十分に説明されていません。コロナウイルス感染症とは異なる巨大災害が起きたら、同じような説明では済まなくなることは明らかです。

首都直下型の巨大地震や、東南海地震などの想定が専門家から繰り返し警告されるように、市民生活の視点からの備えが必要です。大規模自然災害発生時には人命救助と共に、被害軽減の対処が、市民各自の危機緊急時の初期行動が、その後の回復に大きく影響すると言われていています。

社会的な混乱の拡大を異常に恐れる必要はありませんが、とはいえ、正確な情報が対策面でも市民にしっかりと広く伝えられていることは必要です。いざとい

う時にどう行動し、その為に何が必要かを、市民構想会議でも、こうした問題点を検討し議論しておく必要があったように思います。ここでもDXの重要性が求められます。

危機管理上、専門家は「まず自分が生き残ること」が重要だと強調しています。その後で、家族や身の回りの大切な友人等が、大丈夫だったかどうか？となると安全確認の順番を明示しています。残りの時間も少ない中ですが、時間の許す限り対策の大筋だけでも、皆さんからお聞きできたらと思いました。

非常時の公民館活用の機能確認と共に、公民館に非常時の飲料水や寝具や毛布、簡単な身の回りの医薬品などの備蓄など、非常食や簡単な調理器具や道具など沼田市の場合は各種の備蓄を含め、どうなっているのでしょうか？

【会長】

市内に分散して、備品なり必要な物資を備蓄しています。私の市役所時代の記憶を基にお話をしていますが、1箇所にとめておくところが被害に遭った場合、役に立たなくなり全滅してしまいますので、分散して保管しておくように配慮しました。各所の施設に保管してあり、鍵は誰の所と、明確にしてという形を取っているはずです。

【委員】

私の町では、毎年1回は避難訓練をしていますが、備蓄に関して言えば、どちらかというと市役所頼みで、自分たちで備蓄をしているものはそんなに多くありません。例えば、私の町ではアルファ米を人数分用意しており、あとは水です。これは毎年、更新して購入し、避難訓練の時に、前年分を配りムダが出ないように配慮しています。他に食糧の備蓄は、地区ごとではやっていないですね。

市の方で備蓄品がありますが、何か事が起きた時は、市の方から分けてもらうという考え方です。が、本来は自分たちの地区でも、自前で色々備蓄しておくべきだろうと思いますが、予算も無いため、そういうところまで手が回っていないのが実情です。

【会長】

ありがとうございます。そろそろ時間になりますので、このあたりで全体的にご意見をまとめたいと思います。

その他、事務局から何か連絡がありましたらお願いいたします。

【事務局】

事務局からの連絡になりますが、次回の会議日程につきましては2月17日木曜日、午後2時から開催をいたします。コロナ感染拡大の関係で不安な部分もありますけれども、ご予約の方をお願いいたします。

今回は先にお話をさせていただいた「沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の効果検証をしていただき、その後、市長への提言書についてもご検討いただくこととなりますけれども、それらの資料につきましては、前もって送付させていただきますので、よろしくをお願いいたします。事務局からの連絡は以上でございます。

【会長】

これで議事を終了させていただきます。ご協力ありがとうございました。

【事務局】

それでは、これを持ちまして第6回沼田市市民構想会議を終了させていただきます。お疲れ様でした。